本学における職業教育の現状と課題

～在学中の就業体験（実習・インターンシップ・アルバイト）の活性化を目指して～

Nagasaki Junior College Vocational Education: Current Situation and Challenges

- Implementation of Work Experience into the Curriculum -

安部恵美子・牟田美信・平田安喜子・宮崎正則

はじめに

地域で必要とされる職業人の養成機関である地方の短期大学は、若者の学校から職業への移行を支援する役割を担っている。円滑な職業への移行を促進するには、学生が職業に対する理解を深め、職業人としての基本的なセンスを身につける機会である、多様な就業体験を提供することが求められる。

短期大学の学生は、卒業直後に9割以上が就職を希望する。短大在学中に、実習やインターンシップ、さらにはアルバイトをも含んだ就業体験を、専門教育課程や職業教育課程の中にどのように位置づけ、どのような方法で実施するかについての論議の重要性は近年増大している。特に、卒業後の職業と関連の深い職場での就業体験は、在学中の専攻分野に対する勉学意欲を喚起する。つまり、学生にとって就業体験は、自分の進路や将来のキャリアについて主体的に考えようとする意識、すなわち職業観の醸成に繋がる教育効果の高い教育方法といえるのである。

本学では、在学中の就業体験として、食物科・保育学科における、専門分野の免許や資格の取得に必要な学外実習や、英語科の地元の観光施設でのインターンシップ等があり、長年に亘って指導の実績を積み上げている。また、在学中のアルバイトも活発であり、学生の職業観の形成や人間関係づくりに強い影響を与えていることも推測できる。

本稿では、各学科の教育課程に配当された就業体験とその指導の体制や方法に関する検証を行い、こうした在学中の多様な就業体験が、学生の職業キャリアの形成や専攻分野の学びにどのような影響を与えているのかを明らかにすることを試みる。さらに、学生の就業体験の実態を明らかにし、学生のニーズに対応した効果的な就業体験の提供を目指す試論を展開することとする。

1. 各学科の教育課程に配当された就業体験とその指導

1－1. 英語科の『インターンシップ』（牟田）

英語科の学生は、卒業後にサービス業に従事する者が大変多い。サービス業に対する理解は、座学による学びに加えて、実際にサービス業の現場を知ること、すなわち、職業体験が有効であるとの認識の下に、英語科では、「インターンシップ」の内容の充実と強化に取り組んでいる。

「インターンシップ」については、平成18年度現在、日本の短期大学の40.4％が授業科目として実施し、その割合は年々高まっている。また、インターンシップの実習期間は、63.6％が、2週間未満と短期のものが多い。（註1）

本学英語科では、平成9年度から、1ヶ月間という短大としては比較的長期のインターンシップを、地元の大型観光施設である《株》ハウステンボス（以下、ＨＴＢと記載）との連携･協力の下に、

春季と夏季の２回実施している。また、海外留学時のインターンシップも、平成19年春から開始している。この２つの就業体験の内容について、以下に紹介する。

a．英語科の授業科目「インターンシップ」

インターンシップを、英語科の教育目標である「１．話せる英語力の育成」と「２．ビジネス実務教育の推進」を達成するための基幹科目と位置づけて、学生と受け入れ先の施設のニーズに合わせて年次毎の調整や改善を行いながら、継続実施している。

《授業科目「インターンシップ」の概要》（表1）

・平成９年度よりインターンシップ開始（11年目）
・参加者数：　15人～25人(年間)
・時期：　当初、１年次（7月～8月)、その後（2月～3月）追加
・期間：　約１か月間（現場研修も含む）
・場所：　ＨＴＢ内文化施設、ＨＴＢ内ホテル、全日空ホテル（ＨＴＢ隣接）
・内容：　ホテル（料飲課、フロントベル、客室、宴会業務等)、美術館、展示館の案内業務
・報酬：　当初、多少の時給支給あり。現在、食事代補助のみ支給。
・通勤：　交通費支給なし。現在、ＨＴＢの社員寮を利用。

＊　受入側企業の経営・運営状況により、年次により実習内容・条件が変化する。学生への説明や、調整が必要となるケースが多い。

《実践事例：平成17年度の春季インターンシップ》

（１）研修目的（ＨＴＢ設定）
　1）接客の基本精神、技術を学ぶ（接客訓練）　　2）卒業後の職業生活への適応力
（２）期間：　2月24日～3月27日（休日7回）
　2月23日入寮
　2月24日～2月27日導入研修、場内実査
　2月28日～3月26日実習
　3月14日　フォローアップ研修
　3月27日　終了式・レポート発表会＆退寮
（３）実習者数：　８名
（４）実習場所：　ＨＴＢ内の８つの文化施設
　（パレスハウステンボス美術館、ポルセインミュージアム、ギヤマンミュージアムなど、８か所）

《もたらされた教育効果》

・自分に自信がつき、自分で考え、行動することの重要性に気づく。
・働く人の立場から物事を見ることができるようになり、客観的にサービスの善し悪しを判断し、あわせて、サービス提供者へ感謝の気持ちを抱くようになる。
・キャリア選択、就職活動への弾みとなる。
・参加者以外の学生にも良い刺激となり、就職活動の活発化、クラスの雰囲気も良くなる。
・外国人客との接客業務経験により、語学（英語、中国語、韓国語）学習へのモチベーションが向上。

《インターンシップ経験者の卒業後のキャリア》

インターンシップを経験した学生は、在学中を通して、就職活動に非常に熱心に取り組み、希望する職種や企業への就職を達成した。就職試験の面接では、複数の学生より、インターンシップ経験について詳しく面接官から聞かれ、それが採用に繋がる要因の一つになったかもしれないとの報

告を受けた。

・主な就職先:国内客室乗務員、空港グランドスタッフ、ウエディングプランナー、ホテル業、医療事務、子供英語教育関連会社、中国で日本語教師、英国1年間スカラーシップ留学（サンドイッチ留学）

ＨＴＢへインターンシップ生として派遣する学生は、毎年20名前後で推移し、現在までに約200名が履修している。希望者は全員履修出来るよう、春季・夏季の実習期間の人員配当の調整を行っている。インターンシップに対する学生の満足度の高さは、当該科目の授業評価や、各自の実習記録からも確認できる。

また、2年次の専門教科に対する学びの意欲の高まり、就職活動への積極性、さらには、卒後の就職先での高い評価や定着率といった遅効的な効果（＝教育の成果）も生み出している。

インターンシップ学生の受け入れにあたっては、協定書の交換時に管理責任者同士での教育目的の確認や、受入れ先と短大の実際の担当者間で、綿密な打ち合わせが不可欠であることはいうまでもない。

当該実習先であるＨＴＢは、地域の企業の中では、新人社員の教育プログラムが確立している事業体である。本学の学生の他にも、四年制大学・短期大学・専門学校からの多数の実習生の受け入れをおこなっており、インターンシップに対する積極的な姿勢がうかがわれる。近年は、1年という長期にわたる海外（韓国）からのインターンシップ受け入れも進んでいる。実習のため長期滞在する海外の学生には、社員寮を提供して実習期間中の生活をサポートしている。

指導実績が豊富な当該施設において、学生がインターンシップ期間中に学んでくる内容は、年次間や学生個人間における差異が少なく、均質化しているので、安心して学生を送り出すことが出来る。地方の短大にとって、こうした施設が近くにあることは、大変有難く、ビジネス実務教育を推進する上で、大変有効な地域資源である。

また、企業にとっても、優秀な人材の獲得や企業イメージの形成・広報に役立っているものと推測できる。

今後の方向として、学生、受入れ先の企業、双方に魅力・利益のあるインターンシップの実施に向けて、プログラムの調整や円滑な運営を行っていきたい。

表1　インターンシップ実施フロー

<table>
<tr><td colspan="2">4～7月</td><td>8～9月</td><td colspan="2">10～1月</td><td>2月</td><td>2～3月</td><td colspan="2">4月</td></tr>
<tr><td colspan="2">1年【前期】</td><td></td><td colspan="2">1年【後期】</td><td></td><td>春季</td><td colspan="2">評価</td></tr>
<tr><td colspan="2">「インターンシップ」(週1回45分間)</td><td rowspan="3">インターンシップ（約1ヶ月）</td><td colspan="2">「インターンシップ」(週1回45分間)</td><td rowspan="3">福岡就職ガイダンス参加</td><td rowspan="3">インターンシップ（約1ヶ月）</td><td rowspan="3">インターンシップ・プレゼンテーション（夏季春季合同）</td><td rowspan="3">①勤務先評価票　②実習日誌　③出勤簿　④最終レポート</td></tr>
<tr><td colspan="2">事前指導(目的　内容　準備について)
インターンシップ希望理由レポート作成
履歴書作成</td><td colspan="2">事前指導(目的　内容　準備について)
インターンシップ希望理由レポート作成
履歴書作成</td></tr>
<tr><td>関連項目</td><td>「キャリアカウンセリングⅠ」
「ホスピタリティ論」
「茶道文化Ⅰ」
「ワープロⅠ」
「英会話Ⅰ」
「中国語Ⅰ」
「韓国語Ⅰ」</td><td>関連項目</td><td>「キャリアカウンセリングⅡ」
「ビジネスマナーⅠ」
「茶道文化Ⅱ」
「ワープロⅡ」
「英会話Ⅱ」
「中国語Ⅱ」
「韓国語Ⅱ」</td></tr>
</table>

《平成17年度　インターンシップ参加者感想》(例)

学生Ａ　【施設名：受付インフォーメーション】

ＨＴＢでの実習を通して私が学んだ事はホスピタリティの大切さです。私の実習先の入国ゲートでは常にお客様に気を配り、お客様の事を第一に考え、お客様の行動を先読みしたサービスをしなければいけませんでした。そして常に笑顔で明るい挨拶を心がけていなければいけませんでした。これらの事は口で言うのは簡単ですが、実際にしようとしてもすぐにできる事ではありません。

実習が始まってすぐの頃は笑顔を作る余裕もなく、何をすればいいのかもわからず、ただひたすら同じ言葉を繰り返すだけでした。しかし、だんだんと日が経つにつれて接客にも慣れ、お客様の事を考えられる余裕も出て来ました。職場の先輩方からアドバイスを受けた事を実践し、先輩方の技術を盗んで自分なりに工夫をして接客してお客様に喜んでもらえた時はとてもやりがいを感じました。相手を喜ばせる為　した事が自分にも同じように喜びとなって帰って来て、自分の笑顔で相手を笑顔にする事ができたら、今度は逆に自分が笑顔にしてもらえると言う事をこの実習を通して強く感じました。

また実習前はＨＴＢ実習の参加希望を出した事を後悔するほど不安でしたが、実習が終わった時には自分にも出来たという自信につながりました。ＨＴＢでの実習で得た自信や学んだ事、身に付いた事と言うのは今の私生活の中でもとても役に立っていると思います。

実習が終わっても最初のうちは自分は以前と特に何も変わっていないと思っていましたが、今振り返って考えてみると以前より自分に自信がついたと思うし、積極的に行動出来るようになったように思います。

初めてする事や新しい事を始めるのは今でもとても不安で勇気のいることですが、頑張ってやったことにはそれなりの結果が付いてくるし、自信もつくと言う事を知ったので、これからもいろんな事に挑戦していこうと思います。

学生Ｂ　【施設名：陶磁器展示施設】

私には今までアルバイトの経験がなかったので実習が始まる前は緊張と不安でいっぱいでした。はじめの頃は立ち仕事もきつく、焼き物にも興味がなく、はやく実習が終わればいいのにと思っていました。しかし、先輩方から色々なアドバイスをもらったり、お客様から展示しているものを褒められると嬉しく感じ、頑張ろうと思うようになりました。

先輩方からは沢山のお話が聞けました。仕事についてのことだけではなく、就職について、社会について、そのためには今何をやるべきなのか、などの話もしてくださいました。実際に本を貸してくれる先輩もいました。話を聞いていて、やはり新聞や本を読んで知識をつけなくてはいけないと改めて思いました。就職活動の前にこの実習に参加してよかったと思っています。自分の改善すべき点がみえたので、ハウステンボスの方々には本当に感謝をしています。今回の事をこの先の就職へと繋げていきたい。

ｂ．海外での就業体験

《イギリスでのインターンシップの概要》

・留学先：国立英国チチェスターカレッジ（姉妹大学）

・留学期間：平成19年1月6日～4月2日

・目的：　語学留学＋職業体験

・インターンシップ期間：　留学後半１～２週間
・実習場所：　本人の希望で調整

平成18年度より、イギリス姉妹校への３か月留学プログラムに、１週間程度のインターンシップを試験的に組み込んだ。実践的英語力の育成という目標の下に、試験的に実施した取り組み留学者５名の内１名が、現地のチョコレートショップでインターンシップを経験し、商品の棚並べや、ラッピングなど、イギリス人スタッフと共に働いた。参加した学生は「(自分の) 英語力不足に落ち込むこともありましたが、お客様からの注文や会話に何とかこたえることができた時は本当にうれしかった。(中略) ショップで働いているときの私は、学校やホストと一緒にいるとき以上に、必死になって相手の言っていることに聞き入っていたと思います (報告書より抜粋)」と述べている。

今後、積極的にこのプログラムを展開するためには、１) 参加学生の英語コミュニケーション (英会話) 能力を測定し、レベルに応じた職場や仕事内容の決定方法の開発　２) 海外での職業体験に消極的になりがちの学生のインセンティブを段階的に高める方法の開発の２点が、課題として残っている。(牟田)

１－２．食物科 (製菓コース) の『インターンシップ』(平田)

本学食物科は、調理師を養成する調理コースと製菓衛生師を養成する製菓コースとの２コースから成り立っている。共に専門性の高いコースで、卒業後それぞれの資格を活かした職場への就業を望む学生が多い。しかし、実際には職場の現状を理解し希望している学生は少なく、職業に対する憧れ、イメージが専攻しているように見受けられる。

食物科の中で、栄養士・管理栄養士養成カリキュラムでは臨地実習として学外実習が必修とされているが、調理師・製菓衛生師では規定がない。調理師養成では、学外実習を行う場合実習先の指導者の要件など一部規定があるが、製菓衛生師については一切記載がない。そのため本学製菓コースでは、設置当初学外実習を行う予定がなかった。しかし、学内では１つの製品のみ少量製造するのに対し、現場では毎日多数の製品を大量に製造し、販売している。学内の実習と職場での違いを就業前に体験させる必要性を感じ、１期生が２年次の折より、学外実習として１週間の就業体験を実施した。

授業科目「インターンシップ」:　製菓コースでは、平成15年度より２年次の夏期休暇中を利用して、学外での実習を１週間行っている。１年目は、本学周辺の専門店へ依頼しての体験となったが、２年目以降は学生達の希望する地域での店舗へ依頼を行った。今年度までの実績は以下の通りである。

表2　製菓コース　インターンシップ参加数
（実習期間は基本的に1週間、一部2週間実施する場合もある）

実施年度	参加数	実習先	備考
平成15年度	6	洋菓子・個人店　5 ホテル　1	就職内定　1
平成16年度	13	洋菓子・個人店　10 和洋菓子・個人店　1	県外　3 就職内定　1
平成17年度	11	洋菓子・個人店　8 ホテル　1 製パン・個人店　2	県外　6 就職内定　4
平成18年度	14	洋菓子・個人店　8 ホテル　2 製パン・個人店　2	県外　6 就職内定　1
平成19年度	11 4（＊1）	洋菓子・個人店　7 ホテル　1 製パン・個人店　3	県外　8 就職内定　1

＊ H18年度までは学外実習として開講。H19年度よりインターンシップに名称変更
＊1：平成19年度　4名は、学生独自でのインターンシップ依頼を行ったもの

《インターンシップ実施までの流れ》

・実習先のリストアップ（各学生が希望する店舗などの連絡先を調べる）
・実習担当者による依頼
・持参書類の準備・事前指導
・事前打ち合わせ（実習生が各自連絡を取る）
・インターンシップ（約1週間）　　＊　近郊は教員が巡回挨拶を行う
・事後処理（実習先への礼状・レポート作成）
・実習先の評価、報告書などからインターンシップの評価

1週間の学外実習として、担当教員のほうで実習先に依頼を行い承諾を受けてから、実習する学生が事前打ち合わせなどを行っていた。目的意識をもってもらうため、持参する書類には個人の目標などを記載させていたが、それでも目的意識の低さを指摘されることが多く、今年度からは一部希望者は自分で実習依頼の段階から体験させた。当然事前に指導を行うが、能力のある学生にとっては就職活動に役立ったと好評であった。

《教育効果》

・実習先を探すことで就職先を明確にすることが出来る
（お菓子作りが好きで進学した学生が、どの分野でどのような職場を希望するのか、再確認する機会となる）
・職場で求められる人材を知ることが出来る
（全ての学生が、挨拶の大切さ、声の大きさ、協調性を必要事項として実感している）

・重労働の職場で、体力が要求されることを実感
・インターンシップ後、学内の実習で積極的に動く様子が見られる

《インターンシップ後の学生の感想》

学生Ａ（宮崎県　洋菓子店）

自分で判断すべき所、してはいけない所の判断が遅いと、行動が遅くなり、もたついてしまう。実習初めのころは、頭の中がいろんな選択でいっぱいだった。実習中盤から最後になるにつれ、自己判断も出来るようになってきたが、言われたことをメモせず同じことを再度聞くこともしばしばあって緊張感がなくなっていることも実感した。

自分が仕込んだものが次の日仕上げられ、商品として店頭に並ぶ嬉しさを知った。（途中省略）部長からメレンゲの製法、共立て、別立てなどなど仕込みの際に質問された。覚えていたので答えることが出来たが、説明しなさいと言われることがあるので、学校の授業をしっかり受けることが大切だと思った。スタッフの皆さんとコミュニケーションをとるようにすること。仲良くなれれば、質問もしやすくなるし、何よりも楽しく実習できる

学生Ｂ（佐世保市　ホテル　ペストリー部門）

実際の現場では、休憩時間がその日によって違い、８時間以上働くことが多いので、まずはもっと体力をつけなければいけないと思った。製造工程では、ホテルのパティシエは１，２名でそんなに多くいないことを知った。そのような人数で商品を製造するためには、てきぱきと動くことが大切だ。また計量を一気にするので、製造工程を誤れば、そのお菓子は全部売り物にならなくなるので、しっかり確認しないといけないと感じた。また、失敗しても臨機応変に対応していくことが大切だ。これからの目標として、周りを見て行動し、飾りつけももっと工夫をしていきたいと思う。

学生Ｃ（佐世保市　製パン　　自身で実習依頼）

依頼の電話は、言葉が詰まってしまい、相手に内容をうまく伝えることが出来なかったと思う。もっとたくさん練習してから電話をかけたらよかったと思った。

実習では、ミキシングから焼成、窯だしまで全ての工程を体験できた。ミキシングでは生地の膜を確認したり、時間を計って分割や丸めをしたり、焼き色を見てパンを窯から出したりして、製パン技術が少し身についた気がする。（途中省略）パン屋さんは自分が思っている以上に忙しくて、とても驚いた。個人で経営しているお店は、特に忙しいと思う。今後就職先を決めるときの参考にしたいと思う。

ここ数年製菓業の採用条件として、２，３日の就業体験を実施する店舗･会社が見られるようになった。採用側として、製造技術だけでなく、学生の人間性、職場での協調性などを採用条件の判断材料としている。そのため、直接就職先に結びつかなくても、就職試験前に現場での体験をすることで、多少ゆとりを持って望むことが出来る。また少数ながらも、夏季休暇中の実習を通じ、その後アルバイトに誘われたり、就職内定をもらう学生も見られた。

製菓業でのアルバイトを望む学生は多いが、地域柄アルバイトの採用が少ない現状では、無償もしくは実習生の謝礼負担ではあるがインターンシップを通し、積極的に就業体験をしてほしいと願

う。

日本では、製造業の職人の地位は決して高くなく、製菓衛生師という資格は定着していないように思われる。一つには、この資格は名称独占ではあるが、業務独占ではない。また資格を手にする方法も、2年以上の実務経験を得るか、高等学校・専門学校・本学のような短期大学における養成施設を卒業後、国家試験に合格する2つがある。そのため、製菓業では、資格の有無、学歴、経験など様々な人材から構成されている。

それに対し、ヨーロッパでは職人に対しては敬意が払われ、マイスター制度が確立されている。特にドイツでは、職業訓練期間デュアルシステムによる職業教育を受け、職人（ゲゼレ）試験に合格するまでは見習いとして働くことになる。さらに指導者となるためには，ゲゼレとして実務経験を積み、さらにマイスター試験に合格しなければならない。職業訓練期間中、見習期間報奨金の最低額が保証され、週1回は職業学校で理論を学ぶ。修行中でも給料をもらいながら理論と実技を学ぶシステムが確立されている。

日本ではこのような製菓業での職業訓練制度が確立されていない。そのため職場によって指導内容に差がある。また技術レベルも職場の指導者によって異なる。1週間という短期間でのインターンシップで製菓技術の修得など無理なことは当然である。が、インターンシップを経験することで、製菓業は決して華やかな職業ではなく、重労働であること。体力、忍耐力を求められること。技術はもちろんだが、どのような人材が求められるのか、自分に不足している点は何かを考える機会となる。

日常生活において洋菓子が身近になり、また海外で活躍している職人が多数注目されていることから、製菓業、とくに洋菓子職人はパティシエとして人気の高い職種になっている。ここ数年、小中学校、高等学校でも体験学習を実施している学校が増え、製菓業もその対象となっている。製菓衛生師養成として専門教育を受けた学生達の就業体験を依頼する場合、高校生との差別化をどのようにするのか、検討課題である。（平田）

1－3．保育学科の『保育・教育実習』（宮崎）

保育学科の実習には、保育実習（保育所・施設）および教育実習（幼稚園）がある。それぞれの実習方針、目的、方法と具体的な実習計画にそって実施している。いずれも事前・事後の実習指導が義務づけられており、施設実習に2名、保育所実習、幼稚園育実習には3名の教員が実習指導にあたっている。なお、各実習には実習巡回が定められ、担当者による計画のもと保育学科全員体制で実習巡回と指導にあたっている。

ここでは、保育所実習・幼稚園実習について、3名の教員による「実習指導」（毎週、各クラス、1コマ、通年）の概要、指導内容、実習前、実習中、実習後の取組、さらに学生の意識調査等をまじえながら報告する。

《幼稚園実習・保育所実習の概要》

幼稚園実習・保育所実習は、本学保育学科（保育士養成課程）で習得した教科全体の知識や技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、幼児に対する理解を通じて保育の理論と実践との関係について習熟させることを目的としている。

実習指導はその目的を達成するために、幼稚園と保育所における実習の目的・内容・方法を理解し、これを円滑に進めていくための知識や技術を習得するものである。

平成１９年度は、２年次の学生が、下記の実習計画にそって実施した。

表３　平成18年度入学生の幼稚園教育実習計画

実習種別・実習先		学年	実　習　期　間
教育実習	幼稚園（１期）	２年次	平成１９年６／４（月）～２週間
	幼稚園（２期）	２年次	平成１９年９／２５（火）～２週間

※２期実習では、幼稚園の行事実習（運動会、遊戯会等）を含むこと

表４　平成18年度入学生の保育実習計画

実習種別・実習先		学年	実　習　期　間
保育実習Ⅰ	保育所	２年次	平成１９年８／２０（月）～８／３０（木）１０日間
	施　設	１年次	平成１９年２／１９（月）～３／３１（土）内の１０日間（実施済み）
保育実習Ⅱ	保育所	２年次	平成１９年９／１（土）～９／１２（木）１０日間
保育実習Ⅲ	施　設	２年次	平成１９年８／３（金）～８／１４（火）の間の１０日間

※８／３１（金）を「帰校日」とし、学生の実習指導を実施

《実習指導について》

実習前の「事前指導」では、各自の学習内容や課題を明確にするという目標のもとに実習の意義を説き、内容を概観し、あわせて実習の心得や事前準備等を具体的に指導する。

実習終了後の「事後指導」にあたる内容として、実習中に得た各自の学習内容を整理し、それを多面的に検討して反省・評価することを目標とする。この実習の反省をもとに、新たな学習目標を明確にし、保育者という職業への円滑な移行を促し、あわせて、２年次後期は、保育職への就職活動が本格化する時期でもあり、授業では、保育施設や保育者の仕事の現状を丹念に把握しながら、保育者としての資質や意欲を育て、希望する職場へ就職できるよう支援することも目標としている。

(1) 前期実習指導内容

前期実習指導は、はじめての幼稚園実習・保育所実習を控え、学生にとっても実習の構想を立てる重要な学習である。特に、６／４から始まる幼稚園実習の２週間は、その後１０月まで繰り返し行われる各実習のスタートとなるので、学生の期待と不安は著しい。指導者としても、この前期の実習指導には学生の実習への意欲と自信をつけるためにきめ細かい指導を心がけた。

指導内容は以下のとおりである。

・オリエンテーション　・自己紹介　・各取組発表会　・模擬保育

・日誌の指導と継続的な漢字指導

・指導案の個別指導　・模擬保育　・幼稚園・保育園実習の１日（ビデオ）

・実習後の学生と実習先アンケート　・実習報告会等を行いながら保育実習の効果的実施を目指す。

◇幼稚園実習（６／４～　２週間）

◇保育所実習（８／２０～８／３０　１０日間）（９／１～９／１２　１０日間）

(2) 後期実習指導内容

後期実習指導は、実習後のまとめと報告会を終え、保育職への就職活動が活発化する時期でもあり、これまでの保育学の学習や実習をふまえ、保育職として社会へ出て行くための内容を中心に指導を重ねてきた。

◇幼稚園実習（９／２５～　２週間）後、実習事後報告書作成、実習報告会、
・就職試験対策…履歴書の書き方、保育技術指導（パネルシアター、エプロンシアター等）、就職活動講話（就職課の先生から就職活動についての指導講話）、小論文指導と模擬試験実施、個人面接実地指導、集団面接、集団討論の実地指導
・講師を招聘し指導講話…絵本の読み聞かせ実践者の講話、先輩保育士の講話等を実施し、これまで実習や保育技術をどう活かし、就職につなげるかを中心に構成した。

指導にあたり特に留意したのは、担当教員の打合せである。一コマ一コマの授業を３名の担当者で協同授業を実践していくのであるから、毎週の授業の打合せを入念に行った。授業展開を確認し、資料の検討・作成、授業での役割分担等を行い、気になる学生への支援や学生の授業参加の意識を向上させ、意欲を喚起する授業を心がけた。

《主な取組》

ここでは、前期実習指導の最初の指導例を紹介する。

○　オリエンテーション指導例

平成１８年度実習生の「保育所実習報告書」（実習生の振り返り）をもとに「実習前準備成功例」「準備不足事項」などの資料をまとめ、幼稚園実習・保育所実習への意識付けをはかった。

図１　事前準備成功例

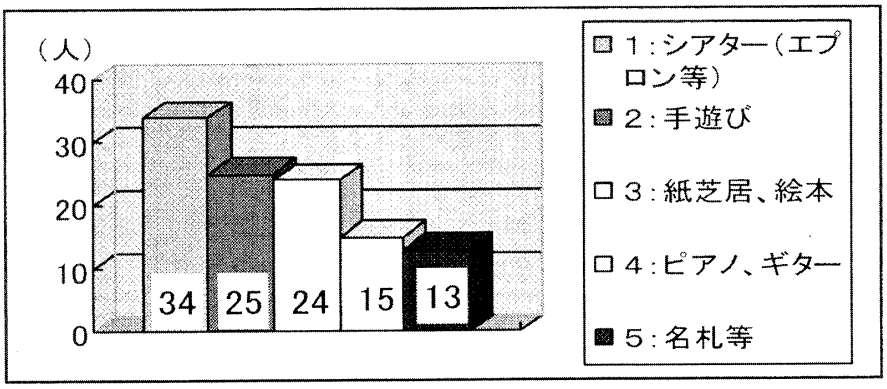


表５　事前準備不足事項

１：オムツの交換	１９人
２：乳児との接し方	２０人
３：ミルクの作り方	１５人
４：絵本の読み聞かせ	１０人
５：遊び（年齢に応じた）	９人

図１は、「事前準備の成功例」　表５は、「事前準備不足事項」である。

今年度の学生にとっては、初めての幼稚園実習・保育所実習である。実習の概要がつかめず何をどうしていけばよいか分からない状態でのこの資料は参考になったようである。

指導後、学生の実習へのアンケートではさまざまな要望が出され、「実習指導」という授業の概要

が理解されていったようである。

実習生が、表5「事前準備不足事項」と指摘した「オムツの交換」「乳児との接し方」「ミルクの作り方」については、学生の声を受けて、保育学科として、これまで２年次後期に設置していた「小児保健実習」科目を実習前の前期に変更し、実習教材の補充や教育環境の整備等を行うことにより解決していった。

図２　実習前の学生の授業への要望

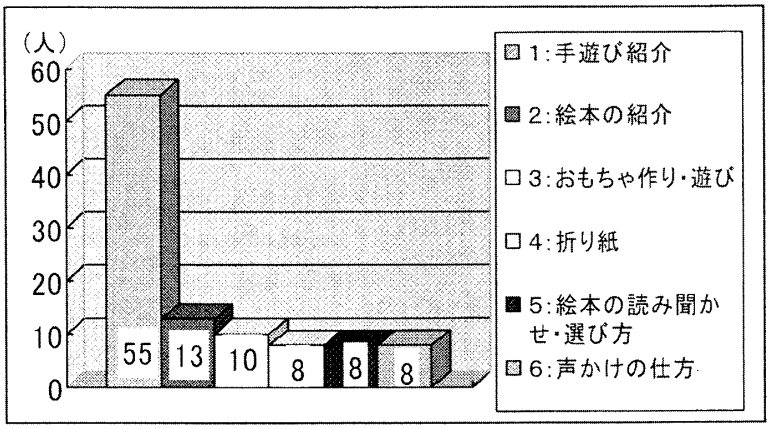


図２は、オリエンテーション指導後の学生の要望をまとめたものである。図１の事前準備成功例の先輩の体験が参考になったようで、前期実習指導への学生の要望が具体的にあがっている。

要望の中で、特に多い「手遊び」については、担当教員の打合わせの中で、学生を授業に主体的に参画しやすいように授業展開を工夫した。学生が「手遊び紹介」という実習に直結する内容を主体的に取組むことにより、授業への構えも関わり方も変わり、クラスの雰囲気も和やかな中で授業を展開できた。担当学生が毎時間授業の中で紹介したい手遊びを事前に準備し、クラスに実技指導をすることは、学生参画の授業実践として意義あるものであった。この取組は、前期実習指導の全コマで実践することができた。（毎週の授業で学生の「手遊び紹介」（５分）と 資料作成、配付等）

表６　授業で役に立った内容

１：手遊び	７７人
２：模擬保育	５０人
３：自己紹介	３６人
４：実習日誌等の記録	２３人
５：オリエンテーション	２１人

《指導の効果と問題点》

ここでは、実習後の学生へのアンケートと実習先からのアンケートをもとに学生の意識と実習先の要望とを比較しながら今後の実習指導の課題を探ってみたい。

〈実習後の学生へのアンケートから〉

表6は、実習後の学生へのアンケートである。手遊び、模擬保育、自己紹介の仕方等、実習指導での具体的な内容が実習の中で役に立ったことを実感している。特に、学生が主体的に継続してきた授業の最初に実演する「手遊び紹介」は、実習での効果があったようである。同時に、これからの就職活動にも具体的な表現活動の一つとして学生が自信を持って行える保育技術にもなった。
以下は、実習後の学生の声をまとめてみたものである。実習指導の内容が実習に役立っていることがわかる。

○「手遊び」について

・興味を持って子ども達が手遊びをしてくれた。子ども達に人気があった。
・「何かしてください」と突然言われたとき、配布されたプリントが役に立った。
・レパートリーがあったので、毎回違う手遊びができた。

○「模擬保育」について

・実際に保育をしたり、指導案を見たりして、自分が部分保育を行うときに役に立った。
・自分の立場に立って、どのように説明すれば分かりやすいかなどが勉強になった。
・話し方、表情、配慮事項、導入の方法など、友達の保育を見て勉強になった。
・アレンジして、自分の部分実習のときに活用しました。
・指導案の書き方が役に立ちました。

○「自己紹介」について

・自分で工夫することができ、早く名前を覚えてもらえた。
・（実習指導で）教わった自己紹介を行うと子ども達が喜んでくれ、先生方からも良い評価を受けた。
・ペープサートを使い、他の実習生とは違う方法だったので、子ども・先生からも好評だった。
・前もって準備をしておいたので、戸惑うことなくできた。
・（実習での）先生たちの話し方、自己紹介の仕方を参考にした。

〈実習先からのアンケート内容から〉

○評価された点

・実習前から制作物を作っていた。
・事前に楽譜を渡していたら、練習してきていた。
・環境整備（壁面制作）に積極的であった。

○学生への要望

・ピアノの弾き歌いを練習して欲しい。
・苦手でも努力する姿勢がほしい。
・もっと体力をつけて子どもと遊んでほしい。
・自分で自信のある保育技術を習得し積極的に表現してほしい。

実習後の学生の声には、実習指導や保育学の学習で学んだ理論や実習を幼稚園実習・保育所実習で具体的に表現できたこと、そして、それが実習先の先生方から評価されたことが学生のその後の実習への意欲を一層高めるものであったようだ。学生の意見や要望を具体的に授業に生かしたこと、「手遊び紹介」として学生の授業参画を実現したことは、その後の学生の授業評価でも確認された。しかし、実習先からのアンケートでは、問題点も指摘された。

○これからの実習生に望むこと

・社会人としての礼儀正しさ（マナー、態度、言葉遣い等）を身に付けてほしい。

・いわれてから行動するのではなく積極性を身につけてほしい。

・てきぱきとした行動が大切です。

この実習先からの指摘は、実習指導で学んだ保育技術を更に自信をもって発揮することも重要であるが、短大生活全般で培われるべき保育者としての使命感と日常的な社会常識を備えた質の高い保育者としての人間性を錬磨することの重要性を求められていることを改めて感じさせられた。

この報告書をまとめるにあたっては、「実習指導」担当者としての吉田美恵子氏、松本千尋氏と共に協同授業の実践を重ねてきた。実習指導内容検討、毎時間の授業案作成、補助資料の作成、実習指導前後、実習期間中の指導、実習報告書のまとめ等々、毎週の打合せ会の中で学ぶことが多かった。この幼稚園実習・保育所実習へ向けての一連の実践は、保育者という職業を目指す学生の目に次のような表現でうつっている。学生の授業評価の記述の中にも教員の授業への後ろ姿を見ているようである。以下、授業評価の協同授業に対する学生の声の一部である。

・実習に向けての指導や就職活動に向けての指導がとても役に立ちました。この授業が一週間の楽しみでした。

・私たちの意見を採り入れた授業をしてくださったのでとても勉強になりました。

・自分が真剣になって取り組めば、就職試験の時、役立つことをたくさん身につけられました。

・とても不安だった実習もこの授業のおかげで何とか乗り切ることができました。

・先生の話を聞いたり、先生が私たちの話を聞いてくれたおかげでとても勉強になりました。

・先生たちの間で連携がとれていて気持ちのよい授業ができました。

これから社会人として、保育現場に出て、同僚や保護者などとさまざまな人間関係を深めていく中で子どもたちへの思いを広げていく学生にとって、この協同授業のあり方もまた、一つの提案であったと思う。

《成果と課題》

①実習指導（施設実習、保育所実習）に対して保育学科全体で組織的な取組が広がった。

②協同授業の指導展開により、教材研究が深まり教員の特性が発揮され、学生の要望、指導にも複眼的に対応できた。

③実習指導内容の事前模擬授業体験、指導案の個別指導、教材製作等を含めた事前準備は保育現場からも評価された。

④各実習生の求める保育技術の習得を近隣の各種団体へ提供する等の実践的な体験も今後必要である。

⑤実習生の課題解決への依存的な面は、課題解決力の不足、コミュニケーション力の未熟さ等とも関連し、今後の課題である。

⑥短大生活全般で培われるべき保育者としての使命感、質の高い保育者としての人間性の錬磨は、日頃の授業や受講姿勢と不可分である。その点全学的な取組がこれからはさらに強調されなくてはならない。

（宮崎）

2．短期大学生の就業体験に対するニーズと問題点

次に、短期大学の在学生や卒業生が、在学中の就業体験や、職業への移行支援に対してどのようなニーズを持っているかについて、卒業生を対象とした調査と卒業時の調査から見ていくことにしよう（註2)。

就業体験（インターンシップ）を学科のカリキュラムに取り入れている英語科は、人文系学科の中では、教育条件「実践で役立つ実学性重視の授業」に対する（短大としての）充実度と（学生にとっての）満足度に対する卒業生の評価が有意に高い（表7)。

また、人文系の短期大学卒業生は「実践で役立つ実学性重視の授業」や「就職進路指導の体制や実習の機会」に対する充実度・満足度は、他の分野の卒業生よりも有意に低い（註３）が、この項目の充実度や満足度が高い者は、低い者に較べて「もし今18歳なら同じ短大へ進学する可能性」が高いのである（表8)。

もともと人文系の学科には、資格取得のための実習等を経験する機会が少ないが、「キャリア教育」「実務教育」「職業支援」等に力を入れた学科の新設や改組を行ない、志願者や在学生の実学性の重視･資格志向に応えなくてはならないことを示唆していると思われる。つまり、現在の短期大学には、教育･看護･福祉系などの学科における、資格に結びつく「実学系」の分野の資格要件にかかる実習（必修科目）以外に、質の高い就業体験を教育課程に積極的に組み込むことの重要度が益々高まっている。さて、インターンシップや実習、あるいはボランティア活動等も含めて、学外施設での長期の就業体験への学生の志向性についてみていこう。

特に、免許や資格の取得のための実習が義務付けられている学科の卒業生が、在学中、最も役に立った考える教科目は「学外実習」である。彼らの多くが、実習を通じて専門職としての自覚が芽生え、職業へのイメージを形成することが出来たと答え、短大在学中の就業体験を高く評価している。

幼稚園教諭免許と保育士資格取得のために、2年間で通算2ヶ月の実習が必修である本学の保育学科の学生は、在学中最も力を入れた活動として、「学外での就業体験」を挙げる者が2割に近く、「友達との交際（31.9%）」には及ばないものの、「学校の授業に関係する勉強」と並ぶ力の入れようである。免許や資格の取得のための「必修実習」であれば、学生には、全員履修が義務付けられる。しかしながら、『選択科目』となれば、学生の意識は変わる。英語科のインターンシップは選択科目である。近年、本学では、教員や先輩などからその効果を聞いて、長期の就業体験に参加したいという意欲を持った学生の中に、参加したくても出来ない事情を持った学生が増加していることが問題点として、インターンシップを担当する教員から挙げられている。参加したくてもできない理由は「アルバイトが忙しいから」である。アルバイトよりも学業を優先してほしいと思う教員の気持ちとはうらはらに、アルバイトが、学生の学業継続や生活維持に欠かせないものであることに、しばしば気づかされるのである。

地方の短期大学進学者の家庭の経済状況は厳しい。本学の卒業生や財学生の進学動機には、「経済的な理由」をあげる者が、近年増加している（英語科では、平成9年度卒3.6%　平成15年度卒11%　平成18年度卒21.8%)。また「親元から通える」という理由をあげる者も、22.6%（平成9年度卒）から、45.8%（平成18年度卒）と倍増している。これは、地元で2年間だから高等教育機関へ進学できたという層が確実に増えていることを意味しているのである（表9）表10は、在学中の学費や生活費の負担に関する問いであるが、ここでもアルバイトや奨学金による負担の割合が年々増加しており、学生生活を維持する上でアルバイトは欠かせないものになっている。在学中のアルバイト経験者は、全体の8割を超え、その中で専攻分野と関連のあるアルバイトをしている学生の

割合は、全体では３割弱であり、英語科では43%、保育科では18.2%で、学科による差異が見られ

表7「実践で役立つ実学性の高い授業」に対する評価(人文)

	18年度	全体		15年度		13年度		9年度	
	本学	本学	短大全体	本学	短大全体	本学	短大全体	本学	短大全体
(N)	55	48	593	12	169	19	163	17	161
充実度	3.93	3.69	3.46	3.08	3.55	4.00	3.49	3.76	3.38
満足度	3.85	3.65	3.37	3.25	3.43	3.95	3.43	3.65	3.29

(5段階評価の平均値)

表8 人文系短大卒業生(N=546)の「同じ短大選択」可能性 (5段階評価)

	実践で役立つ実学性の高い授業				就職進路指導の体制や実習の機会			
	充実度		満足度		充実度		満足度	
	高評価群	低評価群	高評価群	低評価群	高評価群	低評価群	高評価群	低評価群
同じ短大選択の可能性	4.04	3.18	3.93	2.88	4.00	2.90	3.96	2.72
差	0.86		1.05		1.10		1.24	

高評価群:「5」「4」選択 低評価群:「1」「2」選択

表9 短期大学への進学理由

	18年度		15年度		13年度		9年度	
	英語科	保育学科	本学	短大全体	本学	短大全体	本学	短大全体
(N)	55	100	67	898	72	916	84	997
自宅通学可能	55.5	51.0	50.7	34.5	44.5	34.5	29.2	22.6
経済的理由	18.6	4.0	7.5	7.1	11.1	5.8	3.6	5.1

(複数選択の全体に対する割合)

表10 学費・生活費の負担 (%)

	卒業年度	N	全く無い	一部分	大部分	全額
a:家族・親戚等	18年度	155	6.5	16.8	37.4	39.4
	15年度	64	0.0	7.8	37.5	54.7
	13年度	70	0.0	7.1	41.4	51.4
	9年度	84	0.0	3.6	29.8	66.7
b:自分のアルバイトや貯金	18年度	155	49.7	41.3	5.8	3.2
	15年度	64	56.3	35.9	4.7	3.1
	13年度	70	48.6	41.4	5.7	4.3
	9年度	84	56.0	41.7	2.4	0.0
c:奨学金	18年度	155	52.3	12.3	21.3	14.2
	15年度	62	61.3	17.7	12.9	8.1
	13年度	70	57.1	21.4	12.9	8.6
	9年度	84	89.3	8.3	1.2	1.2

(安部)

3．インターンシップ・実習・アルバイトという就業体験の調整を目指して

以上に述べた、卒業生調査と卒業調査の結果が示したように「アルバイトが忙しくて、インターンシップ（実習）に行くことが難しい」という学生の声に応えることは、地方の短期大学にとって重要な学生支援の方途である。

さて、アルバイトは「教育活動ではないけれども教育的な機能を果たす広範な広がりを持つ活動」であり「教育プログラム外で学生が自主的に取り組んでいる」活動（註４）とも定義されているが、アルバイトの教育的な機能に着目して、インターンシップや実習と合体することは出来ないか、端的には、インターンシップや実習に報酬を付ける（＝ペイド・インターンシップ）ことが出来ないか、出来るとすればそれを、どのように教育課程の中に取り入れれば、短期大学で展開される教科としての質を保障できるか考えこと、これが当面の課題である。

インターンシップ生に対して、報酬が支払われる例は、国内でも工学系の学生の企業インターンシップなどに見られるし、報酬（時給・日当）ではなく、交通費（補助）や食事代（補助）として受け入れ先から支給される場合もある。

国外では、伝統あるドイツのディアル・システムによる職業教育は定着しているし、東南アジアの観光産業に従事する人材を養成する大学では、最終学年の１年間はホテルや観光施設のスタッフとして勤務することを卒業要件にしているところもある。

前に述べた、本学の英語科のインターンシップでも、学生に日当が支払われた年度もあり、受け

入れ先の考え方によるところが大きいといえる。受け入れ先の企業にとっては、学生の指導に手間と時間が割かれる半面、繁忙時等の戦力として、学生の力を借りることもある。

筆者は、実際にアルバイトとインターンシップ（実習）において、自分がやるべき活動でどこに違いがあるのかという学生の声を聞くことがある。それは、2ヶ月の夏休み期間に、資格取得に必要な実習を20日間、その前後の期間を保育アルバイトとして保育所に通勤した学生たちからの「実習日だと1日1000円の実習費を自分が払い、アルバイトの日は、時給650円を保育所からもらう。自分がやっていることに違いはないので、不思議ですね・・・」との率直な感想である。『資格取得のためだから』『こちらからお願いするのだから』と対応しているが、学外の就業体験にかかる金銭について、毎度、考えさせられる学生からの疑問である。

インターンシップ時に学生に支払われる報酬に関する表立った論議は、まだ見当たらない。インターンシップを多くの学生に経験させることが望ましいとすれば、インターンシップよりはるかに多くの学生が経験するアルバイトとの差異を明らかにした上で、その「すり寄せ」が必要になってくる。その際には、まず、報酬に対する考え方を明らかにすることが求められる。

次項は、地方の短大生の就学継続に対する経済的支援を目指すという目的を持った、「ペイド・インターンシップ」の開発を行った、本学保育学科の事例を紹介する。

3－1保育専攻科の「インターンシップ実習」（安部）

少子化、核家族化、都市化、情報化など、わが国の社会の急激な変化は、幼児の育つ環境も親の子育て環境にも大きな影響を与えている。保育者（幼稚園教諭・保育士）には、複雑化、多様化する保育ニーズや「認定こども園」制度の発足など、総合的な変化の状況に対応する高い専門性が求められている。

その専門性の向上のために、修学年限の長期化や資格の高度化が図られようとしている。（註3）現在は、新卒の幼稚園教諭や保育所保育士の7割以上を短期大学の卒業生が占めているが、今後は、四年制大学（学士課程）の卒業生の占有率が高まることが予測されている。

本学では、この対応策として、平成20年度4月より、「保育学科専攻科保育専攻（以下、保育専攻科）」を開設することとした。本専攻科は、学位授与機構が認定する専攻科である。

機構に提出した保育専攻科の「設置の趣旨」には、「（本学保育専攻科は）短期大学を卒業し幼稚園教諭二種免許状と保育士資格を取得した者に、幼児の発達や学びの連続性を保った教育を展開する力や、特別な配慮を要する子どもへの対応、そして保護者への共感をベースとする援助能力など、現代の保育者に求められる専門的能力を習得させ、地域の保育の発展・向上に寄与する人材を養成することを目的に設置するものである。（中略）地域の保育現場との連携を強化して、地域を知り地域で活躍できる保育人材を輩出する機関であると同時に、長崎短期大学卒業生を含む、地域の現職保育者（幼稚園教諭・保育所保育士）のリフレッシュ教育推進機関を構築する・・・（後略）」と記載した（下線は筆者による）。本趣旨に基づき、保育専攻科の教育課程を編成しているが、本専攻科の最大の特徴は、保育現場での長期のインターンシップを教育課程に組込むことによって、大学と職場での学びを融合させることにある。

学生は、専攻科の学生であると同時に、保育施設（幼稚園・保育所）では、短大で取得した基礎資格で働くパート職などの身分の保育者となる（図1参照）。この養成システムは、「働きながら学ぶ、学びながら働く」ことにより若者を職業人に育てるという職業訓練システム（デュアルシステム）の保育職版・短期大学版ということもできる（図3参照）。

《保育専攻科の資格を活かした「インターンシップ」の展開》

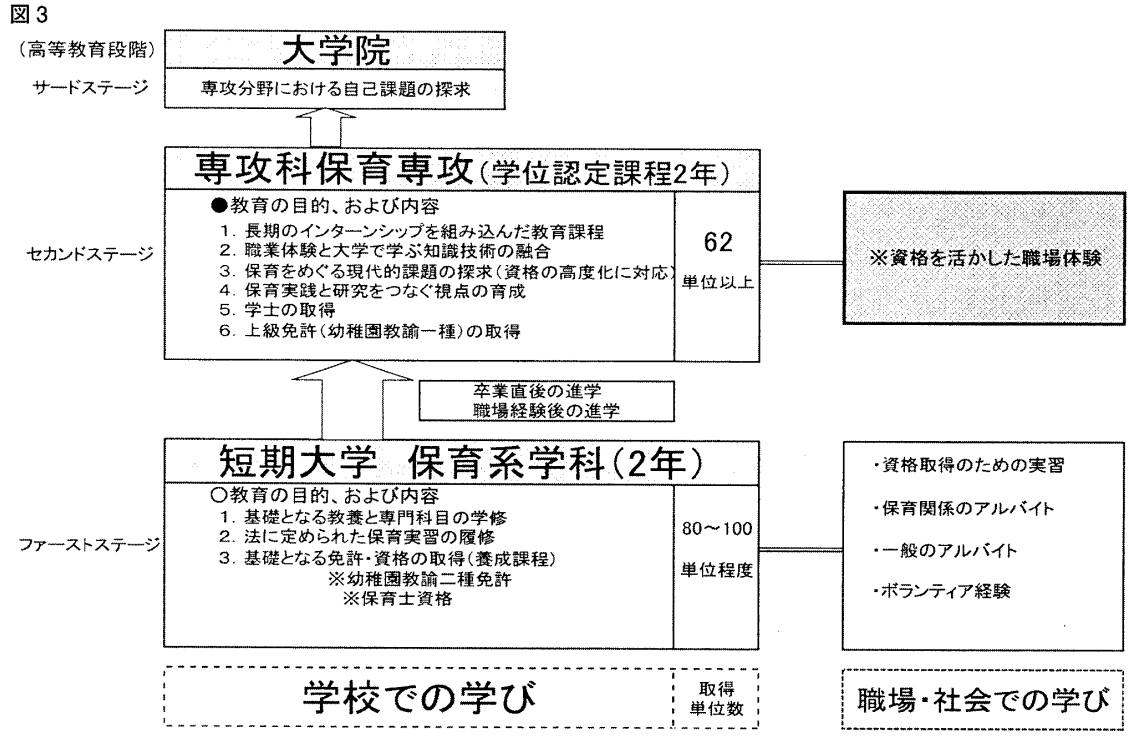
保育専攻科教育課程の中に設けた専門教育科目「保育実践特別研究」は、保育所、幼稚園、児童福祉施設でのインターンシップを内容としている。Ⅰ～Ⅴまで、計10単位の展開である。

Ⅰ　　講義　事前指導　2単位
　　(受け入れ施設とのマッチングを含む)

Ⅱ～Ⅴ　実習　二年間の各セメスターに2単位づつ配当

・受け入れ先での実習　　・1単位＝40時間を標準の実習時間

図3



・実習指導者による訪問指導（1回/2週間）　・実習記録の記入と提出

・実習報告会の開催　　・報酬については事前に受け入れ先と学校が協議する

(実習先)

学生（定員１０名）の受入れは、短大本科の保育実習の受入れ先・就職先の中から選定/依頼し、資格取得のための実習と同様、保育施設（幼稚園・保育所）や児童福祉施設と本学の間で協定書を交わす。

表11　インターンシップの時間配当

時間割のイメージ例	1時限目			
月	授業	授業	授業	授業
火	幼稚園・保育所等での就業（インターンシップ）		授業	授業
水			授業	授業
木			授業	授業
金			授業	授業
土				

（インターンシップの効用）

① 学生にとっての効用

・保育の有資格者として現場を経験することで、保育に関する学びの課題を明確にすることが出来る。

・ 学校では不足する実践研究の手法を体得する。

・ 有資格者としての報酬の獲得…学費等の補填に活用することで、短大卒業直後の学生だけではなく、保育職を継続しながら、キャリアアップを目指す社会人の学びを促進する。

② 受け入れ側のメリット

・ 免許・資格取得者の活用（≒パート保育者としての人材の受け入れと確保）

・ 実習生の受け入れを次年度以降の正規職の採用計画に活用

③ 養成校（短大）のメリット

・ 地域の保育現場との連携強化

・ 教員の現場の理解の促進

・ 地域の保育の向上を目指した共同研究の促進

（安部）

おわりに

短期大学の中で本学は、比較的早い時期から地方の小規模短大の特色を活かし、地元の企業と強い連携の下に「インターンシップ」を教育課程に組み込んでいる。その方法に関する教員の知識や技術の蓄積も増え、経験した学生からは、高い評価を得ることが出来るようになった。

しかしながら、入学してくる学生の資質や、家庭の経済状況の変化に対応した、インターンシップの方法論の開発がまた、求められるようになっている。

本報告は、地方の短大生の、学校で行う就業体験に対するニーズを紹介して、それに適合する「ペイド・インターンシップ」の試みを紹介した。

この試みは緒についたばかりであり、実際の運用については課題も多く、開発途上にある。

本学の学生の現状から導き出された課題を元に、地方の短期大学の学生にフィットする教育活動としての『インターンシップ』のあり方についての研究を進めていきたい。

註１）文部科学省（2006年12月11日）「平成17年度インターンシップ実施状況調査」で、18年度にインターンシップを実施予定の学校数の割合

註２）「２．短期大学生の就業体験に対するニーズと問題点」で使用した卒業生調査は、全国１４短大12,161名の卒業生（卒業後２年目・４年目・８年目）を対象に平成17年６月から12月に実施した。また、卒業時調査は、長崎短大を19年３月卒業する学生（保育学科と英語科計155名）に卒業式前日に実施したものである。

註３）藪敏晴（2007）「短期大学の教育の充実度と満足度」安部恵美子編『短期大学卒業者のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究』第２部第２章

註４）吉本圭一（2007）は、アルバイトを「インターンシップ」と同様の教育的機能を持つ活動とし、「学生生活調査」等の結果から、大学生にとってアルバイトは「ある意味できわめて密度の濃い就業体験」であり「教育プログラムとしてのインターンシップの規模を遥かに上回っている」と述べている。（高良和武：監修「インターンシップとキャリア」第２章２節　学文社）

註３）例えば、文部科学省の「幼児教育振興アクションプログラム（平成18年10月）」の７つの政策の柱のひとつに「４．教員の資質および専門性の向上」を設け、一種免許状の取得機会の拡大や、一種免許状所有教員の採用・配置の促進（都道府県は、政策プログラムに、幼稚園教員の一種免許状所有率の目標値の記載に努める）を計画している。また、保育士資格についても、二年間を養成課程の標準としながらも、上級資格としての四年制課程を卒業した保育士資格の創設が検討されている。（平成19年９月全国保育士養成セミナー鹿児島大会配布資料による）